氏名（本籍）	長峯　聖人
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	博甲第　9884　号
学位授与年月	令和　3　年　3　月　25　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	ノスタルジアが青年期における自己形成に及ぼす影響の検討
主　査	筑波大学准教授　博士（心理学）　外山　美樹
副　査	筑波大学教授　博士（心理学）　相川　充
副　査	筑波大学助教　博士（心理学）　菅原　大地
副　査	筑波大学教授　博士（心理学）　大川　一郎

論文の内容の要旨

長峯聖人氏の博士学位論文は、大学生を対象としてノスタルジアが自己形成に及ぼす影響について検討を行ったものである。本論文は 3 部構成であり、全 6 章から構成されている。著者はまず、第 1 部（第 1 章～第 3 章）において、理論的検討として先行研究の概観をしたうえで、研究上の課題と本論文における目的を示している。第 2 部（第 4 章、第 5 章）では、実験室実験と質問紙調査の双方による実証的検討を行っている。最後の第 3 部（第 6 章）では総合的考察を行っている。要旨は以下の通りである。

（**目的**）　nostalgia はポジティブな要素とネガティブな要素の双方を含む“bittersweet”な感情であり、その独自性から欧米圏で多くの研究が行われてきた。しかし、本邦において nostalgia の研究は非常に少なく、その理由として nostalgia を本邦で扱ううえでの困難さが考えられた。そこで著者は、本邦の心理学領域において nostalgia の邦訳として用いられることの多い懐かしさとノスタルジアに着目し、それらの概念的差異およびそれぞれと nostalgia との異同について検討したうえで、本邦における nostalgia の概念整理を行うことを第一の検討点としている。また、nostalgia は多くの適応的機能を有することが先行研究で明らかになっていたが、その中でも特に自己理解に関する知見が乏しいという課題があった。そこで著者は、自己理解に関する広範な概念である自己形成を取り上げ、nostalgia が自己形成に及ぼす影響について実証的に検討することを第二の検討点としている。検討に際しては、自己形成に関する具体的な側面として本来性、時間的拡張自己（自己連続性、時間的展望）、アイデンティティ形成を取り上げている。

（**対象と方法**）　上述した 2 つの検討点について、著者は合計 9 つの研究を行っている。研究 1 では自由記述による質問紙調査、研究 2 では単一の群（1 要因 1 水準）を設定したうえでの実験室実験を行っている。研究 3 から研究 5 までの 4 つの研究は 1 要因 2 水準による実験室実験を行っている。研究 6-1、

研究 6-2、研究 7-1 では、質問紙調査を行っている。このうち研究 6-1 は主に横断データを扱っているが、再検査信頼性の検討のために一部縦断データを扱っている。研究 6-2 では 1 時点による横断データを扱っている。研究 7 では、3 か月の期間を空けて 2 度同じ調査項目への回答を求めるという形で縦断データを扱っている。研究 1 から研究 7 において、いずれの対象も大学生である。また、研究 1 および研究 2 の結果を踏まえ、研究 3 以降は nostalgia とノスタルジアを同義の概念として扱い、表記も基本的にはノスタルジアに統一されている。

（**結果**）　研究 1、 2 は、第 1 の検討点について実証したものである。まず研究 1 では、先行研究から得られた示唆と同様、懐かしさとノスタルジアはそれぞれ nostalgia と類似した特徴を持つが、お互いに言及している側面が異なることを示している。研究 2 では、参加者に「ノスタルジックに感じる懐かしい出来事」について想起するよう求めた結果、想起した記憶の分類（3 つの側面）において欧米の先行研究（Wildschut et al.、 2006）とほぼ同様の結果が得られたことを示している。著者はこれらの結果を基に、従来（長峯・外山、 2016）のノスタルジア喚起手続きを一部修正し、その定義（個人の過去に対する感傷的な思慕）に加え、ノスタルジアの補足的な説明として「ある過去の出来事を懐かしく感じ、感傷的（センチメンタル）な気持ちになること」を教示することが適切であるとしている。

研究 3 から研究 7 は、第 2 の検討点について実証したものである。研究 3 では、平時の状況（研究 3-1）と本来性への脅威を与えられた状況（研究 3-2）という 2 つの状況においてノスタルジアを経験すると本来性の得点が高くなることを示している。研究 4 では、自己連続性の概念のうち「変化」に関わる下位概念である自己－出来事関連性に着目し、ノスタルジアを感じる出来事は、自己－出来事関連性が高いと評価されやすいこと、およびそれらの関連において心理的成長感の認知が媒介することを示している。研究 5 では、ノスタルジアが喚起されると時間的展望（特に、未来への展望）が肯定的になること、そしてそれらの関連を本来性が媒介することを示している。研究 6（研究 6-1、 6-2）では、特性ノスタルジアを測定する尺度である Southampton Nostalgia Scale（SNS: Routledge et al.、 2008）の日本語版を作成したうえで、その信頼性と妥当性が高いことを示している。最後の研究 7 では、特性ノスタルジアの高さがアイデンティティ形成の側面のうち特にアイデンティティ探求（広い探求、深い探求、反芻的探求）に正の影響を及ぼすことを示している。

（**考察**）以上の知見を踏まえ、著者は 3 点の結論を示した。1 点目は、懐かしさとノスタルジアの概念的差異を整理したことで本邦における nostalgia の喚起が可能になったということである。2 点目は、ノスタルジアは自己形成の多様な側面に影響を及ぼすということである。そして 3 点目は、ノスタルジアが自己形成に及ぼす影響は一時的なものではなく、長期的に及ぶものであるということである。また著者は、自己形成という点から教育的な領域におけるノスタルジアの応用可能性についても議論している。

審査の結果の要旨

（**批評**）本論文は、nostalgia の概念整理を行い、本邦におけるノスタルジア研究の基盤となる知見を提供したという点が大きな成果であるといえる。加えて、これまで明らかにされていなかったノスタルジアによる自己形成への影響について、本来性、時間的拡張自己、アイデンティティ形成という多様な側面から検討を行い、総じて正の影響があることを示した点は、ノスタルジア研究および自己形成研究の双方において学術的意義および教育的意義を持つと評価された。

令和 2 年 12 月 23 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。